

不定量表現“X+前后”に関する認知的考察

A Cognitive Research on the Unquantitative Structure of “X+Qian Hou”

周 云

ZHOU Yun

要 旨

不定量表現構文“X+前后”については、現行研究は語彙・構文・統語論及び語用論を用いた帰納的分析が中心で、主にXの下位カテゴリー及びそれぞれの時間的特徴について考察しており、その認知的メカニズムは未だに解明されていない。そこで、本稿は空間参照枠 (Spatial Frame of Reference)、時間メタファー (Temporal Metaphors)、ゲシュタルト原則 (Gestalt Principles) 等の認知言語学理論を用いて、Xの共通する特徴及び“前后”との認知的相関関係、即ちその認知的メカニズムの究明を試みた。Xの時間的特徴に関して、認知言語学における時間の性質に基づき、“時点”「時点」や“时量”「時量」の内在的特徴についてもさらに考察した。最後に、上記の考察結果を踏まえ“X+前后”による不定量意義に対し新たな認知的解釈を行った。

<キーワード>: 中心不定量、参照枠、時間メタファー、時点

はじめに

“X+前后”という不定量表現構文は“中心不定量”に属している。“中心不定量”とは、Xに方位名詞“前后”「前後」、「左右」「左右」、「上下」「上下」を後続させ、Xを中心参照点とするその“前后、左右、上下”への「拡散量」である¹。この「拡散量」は定かではない。そして後続する方位詞（“前后、左右、上下”）により、中心参照点となるXの属性は異なってくる。本研究は“X+前后”に絞って考察するものである。まずその構文例を見てみよう。

(1) 根据预测, 进入轿车需求爆发期将在 2005年前后。(《人民日报》2002)

予測によると乗用車需要が爆発的に増えるのはきっと2005年前後だろう。

(2) 一到 春节前后, 亲朋好友凑在一起, 除了吃喝之外, 就是不分白天黑夜的玩麻将。

(《人民日报》1994)

¹ 周云 (2017) で初めて取り上げた概念及び定義である。

春節の前後になると、親族や友人が集まり、飲み食いのほか、昼夜を問わずマージャンをする。

- (3) 明治維新前後給曾祖父寄来几封信。(《万延元年の足球队》)²

明治維新の前後に曾祖父に何通かの手紙を送ってきた。

- (4) 所以每次考试前后是学生心理最不平静的時候。(《科技文献》)

だから毎回試験の前後は生徒の心が最も落ち着かない時である。

- (5) 这是我来北京前后的一段经历。(筆者による)³

これは私が北京に来る前後の体験である。

以上の構文例から、Xはどれも時間を表す語句(例えば“2005年”)か時間に関わる語句(例えば“春節”“明治維新”“考试”“我来北京”)である。しかし、すべての時間性語句はXに使用できるのかと言えば、そうとも言えない。以下の構文例をみると時間性語句である“两个小时”はXとして使えない。

- (6)*我睡了两个小时前后。

私は2時間前後寝ました。

- (7) 我两点前后睡的。

私は2時前後に寝たのです。

では、なぜ“两点”は対応できるのに、“两个小时”はXに対応できないのか。Xは一体どういう性質の語句であるのかという疑問が生じる。

この問題について、これまでの多くの研究は語彙・構文・統語論及び語用論を用い、帰納的分析を行っている。例えば、郭攀(2001)は通時と共時の両方から、Xを“数量式表时词语”「数量時間語句」、「固有的时间词语」「固有時間名詞」、「事件性表时间词语」「デキゴト時間語句」の3つに分類し論じている。また王红厂(2005)は語法特徴、結語価及び文の構成成分に基づき、Xを“双限时间名词”「二極(間)時間名詞」、「过程义时间名词」「プロセス性時間名詞」、「一价动词」「1項動詞」、「词组」「フレーズ」に分類し考察している。これらの研究はそれぞれの下位カテゴリー及びその時間的特徴について個別に論述することに集中しており、Xの共通する特徴については論じていない。

昨今、認知言語学の視点により“前后”等の空間方位詞に対する研究は増えつつある。谢亚红(2012)はメタファー理論を用いて“前后”の時間意義について考察している。但し、

² 作者は大江健三郎で、訳は邱雅芬である。

³ 以下、全ての用例に関して出典が明示されていないものは筆者の作例である。

“X+前後”の分析に際し、Xの範疇に対する考察においては認知的視点を用いていない。蔡淑美(2012)は“前”及び“后”の時間的認知メカニズムに対し分析しているが、“X+前後”まで及んでいない。趙無忌(2016)は認知言語学理論の枠組みに基づき、「上下」と「前後」の両時間軸を用いて「前」、「後」等方位詞の意味的拡張に絞って考察している。それに対し、鄭新爽(2021)はメタファー理論のほか中国語の書字体系等の認知スタイルも取り入れ、「上下」、「前後」、「左右」による時間表現の認知プロセスについて分析している。以上、代表的な研究を見てきたが、いずれも“X+前後”の不定量表現の認知的メカニズムに対し明確に触れていない現状である。

そこで、本稿は認知言語学の理論に基づいて不定量表現としての“X+前後”のメカニズムについて考察していく。具体的に言うと、“前後”はどのような時間メタファーにより不定量表現に拡張しているのか、Xはどのような時間性語句であるかなど、その認知的理論根拠及び共通する特徴の解明を試みる。さらに、“X+前後”の不定量意義について認知的な解説を行う。

2 “前後”の空間認知

認知言語学では、“前”と“后”の2つの相反方向はゲシュタルト原則 (Gestalt Principles) の空間的類同性に基づいて心的操作によりグループ化され、一まとまりの“前後”に認知される。複合された“前後”は空間軸によって繋がっている「有界的」(Bounded)な空間距離、もしくは空間幅を表すことが可能である。即ち“前”と“后”という2つの空間方向を“前後”軸上の任意の2点として認知できる。図1のように、「前後」方向軸上に‘h’と‘h’の間の距離または幅になる。

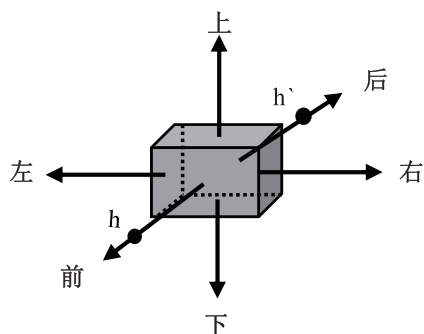


図1 “中心不定量”の空間イメージ図

空間認知研究によると、ある物体がどこにあるか、もしくは物体自身の方向を言語化するには「空間参照枠」(Spatial Frame of Reference)⁴に従い規定しなければならない。空間参照枠には「絶対(Absolute)参照枠」、「内在(Intrinsic)参照枠」、「相対(Relative)参照枠」の3つが含まれている。ここでは、それぞれの空間参照枠を用いて、“前後”による空間量表現の例文を考察してみる。

- (8) a 车前后长3米。 車の前後の長さは3mである。
b 车前后长3米多。 車の前後の長さは3mあまりである。

- (9) a 屋子前后种了很多树。
家(家屋)の前後にたくさんの木が植えてある。
b 屋子前后种了100棵树。
家(家屋)の前後に100本の木が植えてある。
c 屋子前后种了树。
家(家屋)の前後に木が植えてある。

- (10) a 两棵树前后有5米的间距。
2本の木の間距離は5メートルある。
b 两棵树前后有5米多的间距。
2本の木の間距離は5メートルあまりある。

- (11) a 前后两棵树有5米的间距。
前後に並ぶ2本の木の間距離は5メートルある。
b 前后两棵树有5米多的间距。
前後に並ぶ2本の木の間距離は5メートルあまりある。

(8)の「車」の場合は、「前後」という方向軸を内在し、言語表現にすると(8a)は“前后长3米”という定量表現である一方、(8b)は“前后长3米多”という不定量の意味表現もできる。“长3米”は定かな長さであるが、“长3米多”は定かでない長さである。したがって、この不定量表現は“前後”によるものではなく、後ろの“多”によるものである。

例(9)の“屋子前后”、“屋子”⁵を中心参照点とし、その「前」と「後」の相反する方向にある空間を表している。この空間幅は定かではない、「前後」の方向性に基づく空間指示により「閉合」されている不定空間である。“屋子”そのものの前後距離は定かであるうえ、

⁴ Levinson (1996, 2003) を参照。

⁵ “屋子”の場合でも自身に「前後」という方向軸を内在しており、「内在参照枠」による空間認知である。

認知主体視点によらない内在方向性を有する。そして文脈により、(9a)の“种了很多树”は不定量であり、(9b)は“种了100棵树”はある定数量であり、(9c)の“种了树”はただの陳述である。即ち“屋子前后”による量的表現ではない。

例(10)は“两棵树”であり、“树”には内在している方向軸を持っていないため、“两棵树前后”とは「相对参照枠」に基づいており、認知主体の視点で決める「前」と「後」の2本の木の間距離である。なお、後ろの文脈による不定量を表すことも可能((10b))。

明らかに、例(8)と(9)は「内在参照枠」に基づく言語表現である、(10)と(11)は「相对参照枠」によるものである。但し、(11)の“前后两棵树”の文構造は“前后X”という構造であり、本稿の考察対象外となる。

認知主体の視点に依拠するかどうかにより、(8)(9)(10)を図式化すると図2-1と図2-2のようになる。図2-1(a)と(b)は認知主体の視点によらない、事物自身に備えている「内在参照枠」によるものであり、図2-2は認知主体の視点による「相对参照枠」である。「前後空間」を表す方向は「自己中心の方向づけ」(The Me-FIRST Orientation)⁶に基づく、主体の視点は“前”から“后”へ移動する方向であるため、「前→后」と表す。

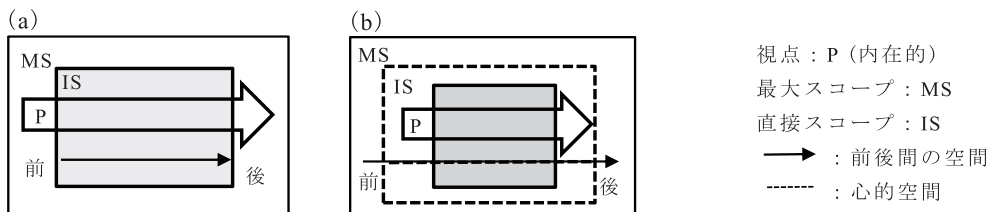


図 2-1 「内在参照枠」の場合、“前后”が表す空間量

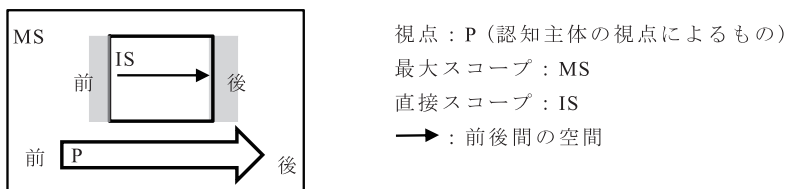


図 2-2 「相对参照枠」の場合、“前后”が表す空間量

⁶ Lakoff and Johnson (1980) によると、人間は直立の姿勢で活動し前方を見、前方に向かって動き、自分をDOWNよりUP、BACKよりFRONT、PASSIVEよりもACTIVE、BADよりGOODとみなし、自分自身を基準点として認識している。つまりUP、FRONT、ACTIVE、GOOD、HERE、NOWが原型的な人物に最も近い方向づけであり、概念の最初の位置に置かれるのはわれわれの概念体系に一致しより自然である。

例(9)の「内在参照枠」(図2-1(b))は認知主体の視点によらない心的に作り上げられた空間であり、この空間は曖昧で定かでないものなので、不定である。例(8)の「内在参照枠」(図2-1(a))は認知主体の視点によらないが、現実的な空間を表す定かな空間量である。例(10)の「相对参照枠」(図2-2)は認知主体の視点によって前後の方向を付けて表しているのは現実的な空間であり、この空間量は相対的で一定である。

それゆえ、“X+前後”を用いて定かでない空間範囲を表現するのは「内在参照枠」に基づくものであり、図2-1(b)の場合に限定される。

3 空間不定量から時間不定量へのメタファー写像

3. 1 “前後”による時間メタファー

認知言語学では、抽象的な時間概念はすべて我々が実際に経験した空間概念のメタファー写像によるものとしている。“前後”による時間メタファーは、時間の移動と人間主体の移動の関係性により、「主体移動型 (ME: Moving Ego) メタファー」と「時間移動型 (MT: Moving Time) メタファー」の他、認知主体の視点によらない即ち認知主体の位置を参照点としない順序 (SEQUENCE) メタファーの3つ⁷が広く受け入れられている。双方向性の時間認知を図式化にすると図3になる。



図3 MEとMTによる時間認知

図3では時間軸 (t) は方向性を示していない点線で表している。MEの場合は、認知主体が方向性を持っていない時間軸 (t) 上を移動し、前方にある未来に向かって進み、背後は通り過ぎた過去となる。MTの場合は、時間は認知主体に面して移動するため、主体の立ち位置になる「現在」を基準点に、時間軸 (t) の進む方向(点線の下にある実線の矢印の方向)の前方は過去であり、時間の背後にあるのは未来である。この認知的根源はというと、認知主体であるわれわれ人間は常に「目の前」を「未来」とし、「後」を「過去」としているという基本的な時間方向付けにあると考えている。この点に関して、多くの現行研究は言及

⁷ Lakoff and Johnson (1980, 1999)、Moore (2000, 2006) を参照。

せず、ただMEとMTによる「前」と「後」が意味する「未来」と「過去」の相違だけに注目する傾向がある。だが、実はLakoff and Johnson (1999:140) はMEとMTを提起する前に、まず「時間オリエンテーション」というメタファーを取り上げている。そしてこのメタファーの位置づけ及びMEとMTの関係づけについては次のようにまとめている。「時間に関する最も基本的なメタファーは現在におけるひとりの観察者を持ち、そしてその観察者は未来に面しており、過去はその観察者の後ろにある。」「MEとMTの2つはあくまで運動を組み込んだ、時間オリエンテーションメタファーに結合する付加的なメタファーである。」⁸これはまさに前述した基本的な時間方向付けと一致する。つまり「未来」である「前」は認知主体の目の前に限られる、ゆえに時間の「後」は認知主体の面する「目の前」即ち「未来」となる。それゆえに、MEでもMTでも「未来」と「過去」の基本的な方向は変わらないとのことである。そこで、本稿は図3に認知主体の前を常に「未来」に、主体の後を常に「過去」と明記することになっている。

SEQUENCEメタファーは、経路上にある出来事または時点の相対的な位置関係によって時間関係を決めることとなり、時間の移動は時間の外にいる主体の視点によらない、つまり主体の立ち位置を参照しない。複数の事象がその生起から実現という到着点に向かって経路上を移動する場合、先に出現する事象が「過去」になり、後に出現する事象が「未来」となる。これはMTメタファーからの下位分類である(Moore 2000)。これをMoore (2006)、篠原(2008)、鄭(2021)を参照に図式化すると図4のようになる。例えば「2」を“春节”「春節」とし、“春节前”「春節の前」とは「2」の前の「1」に当たる。MTの下位メタファーであるゆえ、「春節」の「前」は相対的な「過去」を意味し、「春節」の後は相対的な「未来」を意味することになる。即ち、「春節」を参照点にその「前」を「過去」、その「後」を「未来」として認知する。

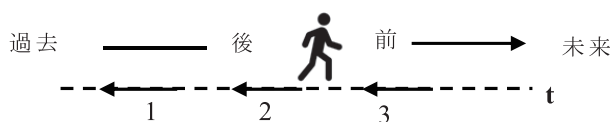


図4 SEQUENCE (順序型) による時間認知

3. 2 “X+前后”の時間メタファー

前述のように、“前后”によるメタファー写像はME、MT、SEQUENCEの3つが含まれ

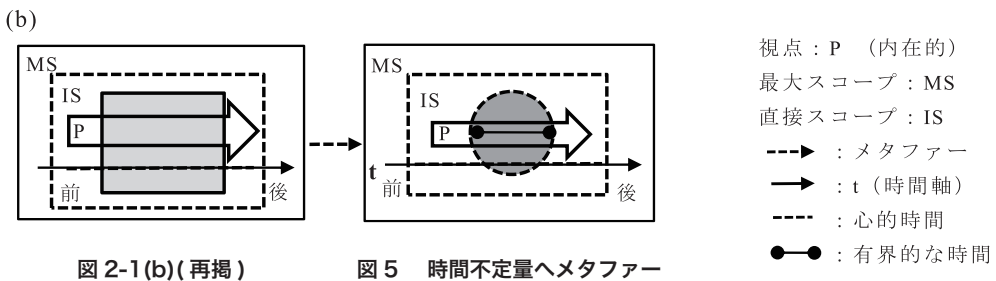
⁸ 計見一雄訳。

ている。では、中国語の“X+前后”という不定量構文における“前后”は一体どのメタファー写像に依拠しているのか。例えば、“1点前后”「1時前後」、「午饭前后」「昼ごはん前後」、「三十岁前后」「30歳前後」、それぞれ“1点”、“午饭”、“三十岁”を中心参照点としている。その「前」と「後」まで拡散している定かでない空間的な距離による量表現から、不確定な時間的表現への意味拡張であることは言うまでもない。但し、この時の“前后”はどのメタファー写像に依拠するか解明する必要がある。

“X+前后”による空間量表現では、Xは認知主体視点によらない内在方向性を有する場合（例（9））のみ不定空間量を概念化することが可能であることを、前節で既に論証している。それゆえ、不定量時間量に対応するXも空間不定量のXに何らかの共通する特性を持っていることが示唆される。では、Xの共通する属性は一体どういうものだろうか。具体的な例から分析してみよう。

“1点”の場合は、24時間の中の1つの順序位置を表す時点であるが、「1時」→「2時」まで60分の経過過程が含まれている。“午饭”であれば、「作りはじめ」→「作る過程」→「作り終わり」と「食べ始め」→「食べる過程」→「食べ終わり」という2つの認知プロセスが想起できる。そしていずれの認知プロセスも時間軸にある有界の距離と時間方向性を包含している。つまり端点を持っている時間的距離であり、認知主体の視点によらない内在的時間方向性を内含しているのである。ゆえに、Xは中心参照点として次の2つの共通する特性を内含していることを示唆する。1つは「開始」→「経過」→「完了」という内在する時間的方向性を有すること；もう1つは開始から完了までの時間的経過距離を有すること。

このことは2節にも証明されている“前后”が空間量を表す言語構造の「内在参照枠」図2-1(b)タイプによる写像になる。図式化すると、図2-1(b)から写像図5のようなになる。



このメタファー写像では、起点領域は認知主体の視点によらない内在参照枠に依拠する不定空間量であり、目標領域は時間不定量である。空間距離を表す図2-1(b)では「□」とな

る空間が有界的であるが、時間へ写像すると点線の「○」で表し、「開始点」-「終了点」の両端点を持っている時間半径を内含している円形状（即ち参照点）になる。時間軸tにおける「前」と「後」は空間の時と同じ移動方向となり、「前」は参照点を経過した時間つまり「過去」を表し、「後」は参照点これから向かう時間即ち「未来」を表すように写像される。それは実に認知主体の視点によらないSEQUENCEメタファーであり、即ち“X+前后”という不定量表現における“前后”はSEQUENCEメタファーに依拠するとのことである。これは空間概念の“前后”から時間概念表現に用いる“前后”への写像であり、“前”は過去として認知され、“後”は未来として認知され言語化される。蔡淑美（2012）でも、用例の統計的分析によると“X+前/后”という構成形式においては、一般的に指示対象の発生順序を取るとしている。これはまさに本稿の考察結果と一致している。

4 Xの共通する特徴及び下位時間カテゴリーとの相関関係

碓井（2004:2）は「時間とは方向性を持ち不可逆的なものである。そして連続性を持ち、分けることができ、且つ量を量ることが出来るものである」とまとめている。また、認知心理学においては人類の時間に対する認知は“时距”「時間幅」(Tempoarl Duration)、“时序”「時間順序」(Tempoarl Succession)、“时点”「時点」(Tempoarl Locus)の3つが含まれているとしている(王振勇・黄希庭1999)。ここの“时距”と“时点”はそれぞれ“时量”と“时点”であり、“时序”は時間軸にある2つ以上の時点の生起順序で“时点”の継起関係を意味することが分かる。即ち時間における下位カテゴリーは“时点”と“时量”である。では、Xはどの下位カテゴリーに属すのか。その答えを見つけるには、X、“时点”、“时量”それぞれの時間的特徴を明らかにする必要がある。

4. 1 Xの時間的特徴

邵敬敏（2004:101）は「语义一致性原則」「語意の一致性の原則」を取り上げている。「即两个词如果能够组成一个语言结构，那么，它们必定具有某个或某些相同的语义特征。否则两者是无法组合起来的。」「即ち二つの語句が1つの言語構造に対応できる場合、二つの語句には必ず似ている語義的特徴を持っているに違いない、そうでなければ2者が同じ言語構造に組み合わせることはできない。」これは言語の形式構造と意味構造は対応関係にあるアイコン性原理 (Iconicity)⁹と合致する。またゲシュタルト原則の「接近」(Proximity)と「類同」

⁹ 張恒悦（2016：70）では「言語のアイコン性原理によると、言語の形式と意味は対応関係にあり、その形式的な特徴は意味的特徴の表出でもある。」とある。

(Similarity) の原則では、人間が意味や距離（空間と抽象距離）が接近する2つの要素を1つの単位として捉えやすいという認知的な傾向があるとしている。これらの原則に従えば、“X+前后”の言語表現構造に対応するXは“前后”と類似する語義的特徴を有することになる。“前后”は時間を認知する基本的な概念構造であるならば、“X+前后”に当てはまるXは時間に関わる語句に限られていると示唆される。即ち図5が表しているように、参照点になるXは認知主体の視点によらないうえ、一定の時間幅を内含している「内在参照枠」を有する時間性語句である。その時間的特徴をまとめると次の2点になる。

- ① Xには時間幅が内含されている。この時間幅は一定である。
- ② Xは「開始」→「経過」→「完了」という内在する時間方向性を有する。

即ち「内在参照枠」による方向付けをしている。

4. 2 “时点”と“时量”の時間的特徴

“时点”における中国語の言語表現形式は、「数詞+時間単位」のフレーズと時間名詞がよく用いられる。「時点」を表す時間単位は“秒”“秒”、“分”“分”、“点”“時”、“日”“日”、“月”“月”、“年”“年”、“世纪”“世紀”等がある。例えば“5点30分15秒”“5時30分15秒”、“1月5号”“1月5日”、“2022年”“2022年”、“21世纪”“21世紀”等が挙げられる。また、確井（2004）のまとめた時間の「均一性」、「連続性」と「一方向の不可逆的性質」から読み取れるのは、ある「時点」はその前後に隣接する「時点」までの距離は均一であることである。即ち“1小时”“1時間”は“60分”“60分”という「分」単位で均一に刻まれ、“1天”“1日”は“24个小时”“24時間”という「時間」単位で均一に区切って認知されている。“1小时”とは“1天”という時間幅の中にある時刻から隣接する時刻までの「時間幅」であり、例えば“1点”“1時”から“2点”“2時”まで。“1点”から“2点”までの時間的な継起変化は必ず“1小时”即ち“60分”の幅を経過しないといけないゆえ、“1点”という「時点」には実は“60分”という「時間幅」を内包すると示唆される。例(12)のような言語表現はその1例である。

(12) 会议4点10分开始4点50分结束。

会議は4時10分から始まり4時50分に終わる。

各時間単位(“秒”<“分”<“点”<“日”<“月”<“年”等)の間は一種の包括関係でもあり、“点”は“60分”の「時間幅」を内包していることによって類推すれば、“分”には“60秒”を内包し、“日/号”“日”は“24小时”を内含しているということである。図式化にすると図6になる。

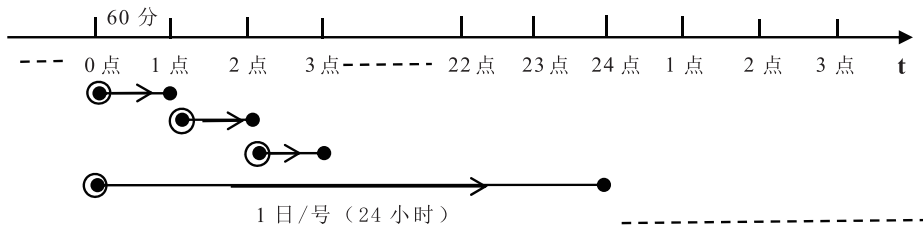


図6 「時点」の内在時間幅のイメージ図

図6では、時間方向性を有する両端点を持っている直線でそれぞれ“点”（→が付いている短い直線）と“日/号”（→が付いている長い直線）を表す。最初の端点の中心を黒く塗りつぶしているのは隣接する前の「時点」の終点を表す。空洞の円周は該当する「時点」の始点を表す。点線を用いて省略された時間を意味する。“1点”「1時」は“0点”「0時」の終点から始まり“2点”「2時」の始点まで終了する、各時点は相互に継起している状態が読み取れる。また、“1点”が表すのは確かに時間軸のある静止状態の定位置である。但し、時間は事物の変化の連続によって構成するものであり、“1点”という時刻は実は次の時点“2点”まで包摂する時間幅を含意している。

時間名詞もそれぞれ相応する「時間幅」を内含している。例えば“元旦”「元旦」、「春天」「春」等。“元旦”の場合、「1月1日」であるため“一天”「1日」という「時間幅」を内包している。张豫峰（2004:31）も“我们认为时点是时间的定位概念，时段是时间的时距概念。时点和时段都牵涉到时间的量值或时间的多少，即时量。”「我々は時点は時間の位置を定める概念であり、時量は時間の幅を定める概念であり、時点と時量とともに時間の量もしくはいくらの時間即ち時間幅が含まれていると考えている。」と論じている。

本稿では、“时点”は時間順序を表す機能も担っており、“时量”と互いに依存し合う存在である一方、時間計測という機能または概念基盤により均一という性質による「時量」を内包すると考える。この「時量」はあくまで均一性によるものであり、潜在的な量である。時間は一方向へ不可逆に進んでいることにより、「時点」は必ず方向性を内在している。「時量」は時間軸における任意2点間の距離であり、時間距離的な量を明示しているが方向性とは無関係である。例えば“每天学2个小时。”「毎日2時間勉強する。」、この“2个小时”は2つの任意の時点の時間量であり、これは「9時～11時」でも「20時～22時」でもあり得る。また、「時点」と「時量」の両方ともに「有界的」であり、表す量の境界は明確になっている。さらに、一部の「時点」詞は一定の条件や文脈により「時量」として使える（李向农1997）。例えば“下午去”「午後に行く」の“下午”は「いつ」という時点を表すに対し、“看了一下午电视”「午

後中テレビを見た」の“一下午”は「時間の長さ」という時間量を表す。但し、語用機能の視点から言うと、“時点”は一般的には「いつ」即ち「時間の位置」を表し、“時量”は「動作・行為の持続の量」つまり時間の長さを表し、両者は明らかに異なっている。

総じて本稿は“時点”と“時量”についての時間的特徴について以下のようにまとめる。

“時点”「時点」

- ① 時間量を内包している。
- ② 時間的指向性を内包している。
- ③ 時間順序を表す機能を持っている。

“時量”「時量」

- ① 時間量を明示している。
- ② 任意の2つの時点の点間距離を表す。
- ③ 時間的指向性を持っていない。
- ④ 足したり引いたりという量計算ができる。

前節で論じたように、“X+前后”に対応するXとしては必ず内在時間幅と内在する時間的方向性の時間的特徴を有するゆえ、“時点”はXに当てはまるが、“時量”はXに対応できないことが分かる。

5. “X+前后”の不定量意義における時点と時量

“X+前后”による不定時間量は時間幅を内含しているXを参照点とするその「前後」まで分散する量であるが、では、この不定時間量は一体どういう量的意義であろうか。郭攀(2001)は“X+前后/左右/上下”の3つの不定量構文の不定量意義について、“加和”「プラス」と“选择”「選択」の2つを提示している。“X+前后”による不定量意義のみまとめると次のようにできる。

- ① “加和”类意义（「プラス」の意味）

即从参照点稍前到稍后的一段时间。

即ち参照点の少し前から少し後までの時間幅である。

- ② “选择”类意义（「選択」の意味）

从参照点稍前到稍后的一段时间中的任一时间点。

参照点の少し前と少し後までの任意の1つの時点を表す。

(郭攀(2001:28)参照)

即ち“加和”とは定かでない時間量を意味する一方、“选择”とは時点の不確定を意味する。そして、この2つの不定量意義は“X+前后”ではなく、後続する動詞即ちコンテキストに依拠しているようである。例(13)の“降生前后”は“降生”を参照点とし、その少し前から少し後の時間幅を意味する。これを“加和”意義という。(14)の“响午前后”は“响午”の少し前から少し後までの時間幅にある時点の意味する。これを“选择”意義という。

(13) 在我降生^{前后}，母亲当然不可能照常伺候大姑子，这就难怪在我还没有落草儿，姑母便对我不太满意了。(郭2001：26)

私が生まれた前後、母はもちろんおばさんの世話をすることはできなかった。道理で私がまだ生まれる前からおばさんは私に少し不満があったわけだ。

(14) 响午^{前后}，怎生不见两个孩儿来。(郭2001：25)

昼前後にどうして二人の子供がこないのか。

より分かりやすい例として次の(15)を見てみよう。(15a)と(15b)ともに“傍晚6点前后”であるが、後続文により不定量の意義が異なる。(15a)の“到”「到達」は瞬間的に完了する動作としているので、ある時点の意味する。(15b)の“热闹”「にぎやか」はある「状態」を意味することであるゆえ、時量を表すことになる。

(15) a. 我傍晚^{6点}前后到。

私は夕方の6時前後に着く。

b. 傍晚^{6点}前后的广场最热闹。

夕方6時ごろの広場は最もにぎやかだ。

この言語事実に対し、郭攀(2001：5)は“这主要是由‘双向复合性方位词’决定的”「これは主に「複合方位詞」に依拠する」「复合后二语素间的语义关系具有多样化的潜在特性」「複合された後の2語素の語義的關係は多様化で潜在的性質を持つ」という意味論的解説となっている。だが、本稿の初めで論述したように、“前后”による空間量表現では定かな量であるのか定かでない量であるのか、“前后”に依拠するのではなく、文の後ろの構成成分に依拠する。また、不定量表現構文に用いるXは「内在参照枠」に基づいているものに限っている。そして不定量表現における“前后”はXのこの性質即ち「内在参照枠」を有することにより、SEQUENCEメタファーに依拠することになる。総じて、本稿は“加和”と“选择”という2つの不定量意義となる認知的理由は、Xの時間的特徴に由来すると考える。Xは時間幅を内含する時点であるゆえ、“前后”で定めている不定かつ有界的な時間軸で、順序を表す時点でも幅を意味する時量でも概念化することが可能となる。ゆえに、後続する文ま

たはコンテストにより時点か時量のどちらかの表現も可能になる。

6 おわりに

本稿は中国語における“X+前后”という不定量表現に用いる“前后”はSEQUENCEメタファーによる時間表現であり、認知主体の視点に依拠せず「内在参照枠」による方向付けであることを明らかにした。また、Xが時間性語句であるのは、“前后”は時間を認知する基本的な概念構造に由来し、“语义一致性原則”とゲシュタルト原則に依拠していると考えている。そしてXの時間特徴は「開始」→「経過」→「終了」という認知プロセス性に依拠する時間幅と内在時間方向性の2つとなる。

今までの先行研究はほとんど語例を基に、語意、構文及び語用の角度からXに対して分類し、さらに構文における文法的役割を考察している。Xは時間性語句であることという大まかな特徴による分類では解説できない特例も多く存在している。例えば、谢亚红(2012)は時間名詞を“无向时间名词”“无方向性時間名詞”と“有向时间名词”“方向性時間名詞”に分け、Xに対応するのは“无向时间名词”としている一方、一部の“有向时间名词”もXに対応できる。また時点数量詞はXに対応するが、時間量数量詞は全くXに対応できないかについて今までの研究ではほぼ触れていない。今後の研究課題としては、SEQUENCEメタファーと「内在参照枠」等の認知言語学的理論及びXの時間的特徴に基づき、Xの語句範疇を再考察する。さらに、Xのプロトタイプ及びその下位カテゴリーを明確にし、今まで解説できない問題に対して認知言語学の視点より新たな解釈を試みる。

<参考文献>

[日本語文献]

- 張恒悦.2016.『現代中国語の重ね型—認知言語学的アプローチ』白帝社
 趙無忌.2016.「認知言語学から見た日中空間辞の意味と機能拡張に関する比較研究」.宇都宮大学博士論文
 篠原和子.2008.「時間メタファーにおける『さき』の用法と直示的時間解釈」.『ことば・空間・身体』
 ひつじ書房:pp179-212.
 鄭新爽.2020.「中国語における時間表現に関する認知言語学的研究-日本語との比較を通して-」.
 広島大学大学院総合科学研究科博士論文
 碓井智子.2004.「空間から時間へ:写像の動機付けと制約」.『言語科学論集』(10):pp1-17

[中国語文献]

- 蔡淑美.2012.现代汉语“前、后”时间指向的认知视角、认知机制及句法语义限制.《当代语言学》
 第14卷第2期:pp129-144
 郭攀.2001.时点性参照+双向复合性方位词.《汉语学习》第5期:pp23-31

-
- 李向农.1997.《现代汉语时点时段研究》华中师范大学出版社 邢福义 主编
邵敬敏.2004.“语义语法”说略.《暨南学报(人文科学与社会科学版)》第1期:pp100-107
王红厂.2005.复合方位词“前后”、“左右”、“上下”研究.南开大学博士学位论文
王振勇·黄希庭.1999.时点、时距和时序信息加工之间的相关性研究.《心理科学》第5期:pp398-402
谢亚红.2012.现代汉语“前后”“左右”“上下”的语义和用法研究.上海师范大学硕士学位论文
张豫峰.2004.X+前后/左右/上下”的分析.《语言教学与研究》第3期:pp30-36
周卫红.2014.X+前后/左右/上下”的约量表述研究.《柳州职业技术学院学报》第14卷第1期:pp46-53
周云(井上云琳).2017.汉日语不定量表现研究.北九州市立大学硕士学位论文

[英語文献]

- Levinson,S.C.1996. Language and Space. Annual Review of Anthropology 25:pp353-382
Levinson,S.C.2003. Space in Language and Cognition.Cambridge: Cambridge University Press.
Lakoff,G and Johnson,M.1980.Metaphors We Live By.Chicago:The University of Chicago Press.
(『レトリックと人生』渡部昇一等訳、大修館書店2019)
Lakoff,G and Johnson,M.1999. Philosophy in The Flesh:The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought: Basic Books Press. (『肉中の哲学：肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦』計見一雄訳、哲学書房2004)
Moore,K.E.2000.Spatial Experience and Temporal Metaphors in Wolof:Point of View, Conceptual Mapping, and Linguistic Practice, Ph.D Dissertation, University of California, Berkeley.
Moore,K.E.2006.Space-to-time mappings and temporal concepts.Cognitive Linguistics 17(2) :pp199-244.